自分もみんなも　明るく　うれしく　よかったね　　R６　第１０号

新井中央小だより

No. 302

ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ　http://azalea.ac.city.myoko.niigata.jp/araich-s/otayori/index.html
ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ　chuou@ac.city.myoko.niigata.jp

2025（令和７）年２月25日

雪国の人々の心！

暦の上では春となりましたが、２月は寒波の到来で県内全域が何度か大雪になりました。

大雪は、わたしたちに交通傷害や家屋の損壊、除雪中の事故など大きな被害を与えます。しかし昔からたくさんの恵みも与えてくれています。６年生は学級活動の一環で雪のグラウンドで、思いきり笑顔で雪遊びをしていました。他の学年も雪とかかわることを楽しんでいるようです。

私は、小さい頃から雪が降ると雪国の人が抱く特有の心を感じずにいられません。２月の全校集会では、次のような雪国の人の心を子どもたちに紹介しました。

まずは、雁木（がんぎ）に現れる人の心です。雁木は、雪国に住む人々が、自分の家の前を通る人たちが雪の上を歩かないでいいようにつくった屋根付きの道です。上越市の高田地区には、かつて雁木が１６㎞も続いていました。その長さは世界一で、ギネスブックに載っています。雁木は、それぞれの家の人たちが、歩く人が雨や風、雪をしのげるように、雪の上を歩かなくてもいいように、玄関を含めた家の前に屋根つきの道をつくりました。もちろん、自分の土地の中に私費でつくりました。高田の家は、隣接していますから屋根をつなげるようにつくります。また歩きやすくするように段差もなくしています。雪国の人が、みんなのために作った雁木には一軒一軒の人への思いやりを感じます。

道路の雪に車がはまって動かなくなることが、４年目前にありました。その時は、道路の近くの家の人たちが、スコップをもって集まり、その車が動けるように協力して雪かきをしました。仕事が終わって疲れていた人もいたと思いますが、みんな嫌な顔一つせずに協力しました。また、雪が降ると、朝早くから人が雪かきをします。雪下ろしをすることもありますが、みんなあいさつをして、声をかけながら作業をします。普段はあまり会話のしない近所の人でも雪がふると、自然に言葉を仲のよい姿が見られるようになるのです。自分のことだけでなく、人とのことを助けたり、協力したりしながら、生活の中で雪とかかわっていくことができるのです。

雪が降ると道路が一段と狭くなり、歩きづらくなります。人がすれちがうのもやっとです。そんな時、雪国の人たちは、前から来る人がいることに気付くと、止まって道をよけ、その人に道を譲り、その人が通り過ぎてから、道を歩きます。譲ってもらった人は、「ありがとうございます。」、ゆずって上げた人は「どういたしまして。お気を付けて。」と会話をし、それぞれの人が明るくうれしい気持ちになります。

全校朝会の最後には、郷土の小説家 杉みき子さんの雪の物語「ゆず」を読みました。雪のしんしんとふる夜道を、少女は歩いていましたが、遭遇したお年寄りを気遣い、道案内したり、転びかけたところを助けたりします。最後にお年寄りから、「ゆずの香り」という感謝の気持ちをもらったことに気付き自分のとった行動（成長）に満足するお話です。また、紹介はできませんでしたが杉みき子さん作「わらぐつの中の神様」は、ぜひご家庭で親子で読んでいただきたい作品です。「見た目の形ではなく使う人のことを考えて丁寧につくることの大切」に気付く作品です。またそのような価値を認めてくれる人が必ずいると、夢や希望をもたせてくれます。

このような雪国の人々の心は、当校の合い言葉「自分もみんなも明るくうれしくよかったね」とつながります。雪の季節を終えると春。春になると見える妙高山の「はねうま」という言葉も杉さんがつくり、小説で紹介しています。雪国の人は春を楽しみにして過ごします。（小林朋広）